

平家物語

長門本  
十四

リ 5  
200 1  
14





平家物語卷十四

志雄軍事

守高漆合戰事

舟藤別當實盛討死事

任藤九郎討死事

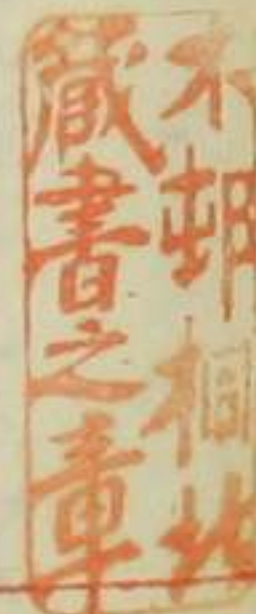
西阪本赤山堂御布施引事

任勢太神宮御事

太宰大貳廣繼事

木曾山門棒牒帖事

平家山門牒帖遺事



薩摩守親頼事

佐渡左衛門尉重實事

法皇鞍馬寺工御事

平家都落給事

池大納言都留給事

朝綱細重能有重被免事

高倉院王子御位可付給事

平家物語 卷十七

志雄軍事

同日志雄軍に十郎藏人の家負色不成たり先ハ越中  
和司盛俊勝の衆て責戦ふ家父木曾に砥波山を追  
ふた化て岩高の橋を引て藤原北為に十三の十七息  
繼居たり其間中家此方の剛比者廿十人回急しそ  
假屋しそり七如く巡酒始て抱い多程ハ其間軍  
此内後出あり評定十任藤九郎依屋と此人ハ  
多ハいし殿系我子余人ハいつとそ源氏の北方ハ衆  
らん其故ハ運命つれ果て中家ハ度ハの軍に戦  
すけぬ源氏の殺意品くといなりと云たりおま

平人源氏の流方へ参り候はるや平家方の別の者も  
皆源氏へ参りたりとて一定山懸つらんする等此山懸  
参りて妻子と死の離あやてせらんといふ殿所と  
云々れい尤急る處とて其子過るより次の日御来  
必定に若源氏参らんと思立らる長井此所別殿  
實盛、彼家より候ひて巡泊して掛ひり候らん  
す小なりて實盛中々々々昨の夜京の宿定に我土  
余人源氏の流方へ参らんといふも實盛一同すと  
中々いふ小を事と爲んといひ執り候らん又い  
はがらんするといひれは全くして変改すらん凡由を

中々いふ實盛をて中々々々夜京此事を實盛終  
夜つんすゑの流方と云ふと出たる等其故は源  
氏の流方へ参りたらんと云はれ候はるや京のむ後との侍  
よ先掛の者共迄出れらるる源氏を源氏へ参りたり  
此等神妙をれとて一人ハ一定山懸つらんする  
と云ふは其山懸を参りたり候はるとてお供の事を情  
かく討ちらるる候はるといふは心来り此ハ一好とて  
死なんと云ふ大雲のよとて海の果さる山供仕り候と社  
中々りた流くに契りて變りて山供を中々中さ、らあ  
利三攻りて討ちりて亡く候らん事實盛におれては

眼のつゝも是すたとい又主を討ちて源氏の  
恩を蒙りたりとも子ある孫に遺傳せん事なす  
れを也又源氏の侍東國の人ともはくめてもま  
楚子家の侍もしてれりの共もて五里を  
取らぬ運命つれなるか及するをほ代にと  
いひも世武士の法も此世にやうし程と此  
人こそ世一二の者にて受候らんいゝをけし  
いふも恩のうけいにもかひなくつらふ家  
軍に多化れしとお傳の主を捨て源氏の法  
不存すとし能くみられん事こそ世に恥  
又さやまのつゝも世に源氏のいふれを存  
なしてお傳の主を捨てし不存人を當時忠を  
いふ一功を入れしとて人をかきしつゝも又  
つゝも後矢つゝも奴系也や孫の者に恩を  
らと東國の弓取共世の中はとてやと  
世に人方とていひて世に命を捨る者  
として世志のつゝも傍輩向はる為として一定  
免びおはれハ恩を蒙りて妻子も副を  
有難し一再び物をかりハ  
寛平二年海に御家  
に附中り  
の境を

寛平二年海に御家に附中り  
の境を

死して死せる山の山姥さん果報五て平家世に  
ものかゝハ實盛なり妻子を能く品せよりのと終夜  
心定ていも實盛にいと後たへとして棟梁より中  
けら母余人此者もむかくは控るつれとを洞を流  
していもれたり 御ふ内持かゝる取の心  
のあすいつらとふくをす事今も始り奇後  
別當の宣ふにつれ皆一所を討死せんすりてと  
て一統に事成ふお海へ一言にけり  
**高安漆合戦此事**  
去程ハ木常のいれふかと押寄てふいふ橋

を引れたり渡りこれ中かろけり宮崎大郡  
此漆に場控のり大浪立てら砂奇奇られ  
て漆濁くなり大水増れ砂奇流はれて河  
のく成り也流れ深き程をふらぬとてい  
馬四足鞍置ては縁結て追渡す鑑りぬらさ  
むいのもいなる本堂是をみて何れよ  
成るものぬいにては綱いくりすのりか  
らて馬力をも一物をりをらとれいあり  
るやうにたせやくと宣ひりれと是を聞て極  
今井権根井大宝小室を始とて二高路平を



事やの千騎のい、二百騎の二百騎に、二百の馬の二百騎の  
百騎の出合で戦はせては、後、山、勢、馬、騎と、聞い  
た、北、二百、馬、騎、を、出、して、戦、は、せ、て、は、後、山、に  
戦勝て、一、軍、一、と、勝、ぬ、と、思、く、め、く、ひ、に、跡、り、た、は、か、い  
い、く、め、ひ、お、た、て、お、な、ま、し、と、り、り、は、し、し、の、先、陣  
仕、化、畏、業、て、り、と、中、て、二、百、馬、騎、に、て、向、い、向、い、志、不  
り、聞、今、の、目、に、り、又、り、ん、信、濃、國、に、住、人、本、を、中  
三、權、も、無、遠、う、次、田、力、中、を、あ、は、い、れ、と、山、植、は、な  
無、光、家、も、い、る、者、の、り、と、時、百、たり、無、光、討、て、高、名  
せ、ら、や、あ、系、と、て、二、百、馬、騎、を、お、具、し、て、常、の、結、を、し、

く、つ、け、を、並、て、二、百、馬、騎、中、の、け、入、山、是、を、ゆ、て  
植、は、次、帝、の、破、敵、を、何、事、も、あ、系、但、て、取、あ、し、並、て  
但、や、く、と、て、二、百、騎、十、人、を、一、し、し、て、中、に、お、い、て、戦  
り、組、て、あ、る、者、共、有、名、あ、る、者、も、り、討、死、す、る  
者、も、り、何、も、り、隙、を、と、り、又、し、す、散、く、小、戦、も、程、不  
山、の、五、百、騎、を、二、百、騎、に、化、して、二、百、騎、小、成、植、は、次、帝  
の、二、百、馬、騎、に、化、して、跡、り、跡、り、あ、り、て、左、右、の、山、と、引、て  
は、く、山、の、小、城、に、け、ら、れ、た、る、を、守、り、す、受、て、甲、の  
結、を、あ、り、て、敵、に、中、へ、は、せ、い、ら、ん、と、す、る、所、に、あ、り、  
小山、田、別、當、有、重、山、の、馬、の、つ、つ、を、左、右、と、志、た、



ふつれておやけ軍に我一人と戦ひしる人守と  
控すし海の人共小戦させてももらん一討をうけあへ  
とてつれはハカ方及引返して是を志すまゝと  
亦家の方武藏三郡たつ有國且言語の境よてお  
免いてかゝる原氏の方か賀の住人林六郎光明二  
百五拾をわ具して且言語の中おのいてあけ入すつ  
と向けて通し一各取て返して堅抗格後に敵  
くくかく武藏三郡たつ有國の福もあはれもあ  
ふ此直雲は火威の儘たて白星は雷いくむに死か  
大中黒比矢廿四十一たか頭高のにおひかゝる志け

後北司の真中取て鶴毛なり馬乃やとくたさ  
たふ人言ふくもんの鞍置て乗たりり向つをれ大  
將軍やとれふはり且而此中に進出て戦ひら  
を光明の掃は野宮八郎光宗とて大の雷の大力  
精兵十三束ぬくすそ引て志をうけいめてい  
とる有國の鎧止むかいはけいと村をう後つと  
我村通くはり是にわくもりてをふれも馬の  
上して志はくもりて戦ひを原氏の方か我り  
射る程ふるも、儘に矢十三郡いよてられて今  
うとを思ひらん太力を振て中へもせ入てをつく



うらたりにて信如君と雅考を先共格の者とみ  
しり共谷たりやんといひたれハ越中國の佳人宮治  
太師の嫡子入谷尖部為直士ハ十七歳と名乗る長  
信是を剛てつあといふハ如君ハ剛の者共おけ  
あら長綱と組たる者共十七歳と名乗る共とに  
いとあはれ我ハ十七歳成子を結る共和君と同年共  
和君を討つり共負つた軍に勝つたに功す共十も  
勝つた軍に負つたに功す共一我子と同年にあら  
いとあはれ我子ハむくんとありハ汝を討つ  
とて引越す別府ハ入谷をみ共ひて入谷とて

つりく敵ハ絶たる所ハ心何したれハ入谷是をゆつて  
為直是ハつら共たすけよ別府共と云別府是をゆつて  
何か勝つ共といひて急た馬ハ飛下て長綱の甲のて  
入人にいひをあへて共とてを一つみて首をかへ  
木を汝らすたれ共より其後下り入谷を引かこ  
て共や負たると免角是をみ共程ハ長綱の首を  
あはれ共て唯入谷を引かこ共とてみ共入谷共を  
あはれ共とて共共首を引棄飛て入谷逃たり  
別府是をみてハ入谷物ハ知共其首おけ共とて  
追り入谷是を剛て足早ハ逃て木を汝のあはれ持て

今て是は高橋太郎判官首にて侍大將軍の  
首を奪為直つ取仕ていとて赤らせたり別  
府やそ追若て何れハ為せり取てい首也入谷を  
み失ひて入谷くとい何り起りる所ハ高橋判官と繼  
て押し押られてい友に何の勢助と申つる同族  
まゝやと取て急た馬より飛りて後首をのき  
おに置入谷を引おきしてまおひたるつと何れハ  
おすこ中候てお多の首をえて逃て赤らせたり  
取らると申と云んハ本當及是を聞て是ハいふ  
と買め入谷さうんは是かかたりたういふすねい

一首ハ二首ハ三人有誰れて取らん十の勢入谷やりら  
り別府よりいおもたういふす本當及たはさら  
んにいふ、我をたりと中條存外也と宣へん  
入谷やりらと云んハ中條のハ為直長綱に繼て押し  
ら化て人取と云ん化と申つる同族の、嫡子入谷ハ本  
為直生年十七歳と名乗ていといと申しつら  
割の者也我十七歳に成子侍たり和若う名乗を聞て  
我子と申ひし家子いふと申ひしと汝を討  
つらとて押し押つてい奴ハ助さん十方流さんを化  
即んを放ちてい時年摺らうなりつたぬれり

けたる刀を北ハ二刀斗さして弱らんする處を定の  
首とおもひいてつひに是為直々取た刀首とやら北  
木曾及面血く是ゆや原系弓矢をいさう社ん扱  
一ハ北若花も中に押へら北かろ放ちあつむ所  
を定の首と稱ういたり是程の輝か弱らん  
疑ひく福らいつあせんす北甚い實ハ別府名たる  
首也ゆい此是貴有ハ一見を別府の  
取たる首小交既ハト知せられり

齊藤別當實盛討死此事

是を志すまじしと中家の古ハ長井兼友ハ出當實  
盛未地の沛の直垂見て三言兼あそ押家たり保  
氏方ハ信濃國七任人ハ保列當二百廿路にて向合  
五小ハ北平乱戦ハ子塚の部ハ散ハ戦ハ北ハ  
實盛染御りふく計れて落多ハ實盛心切にハ  
一橋のにあらまハ戦ひたり子塚實盛を追搦て  
中野と唯一人となりて戦ふハ能ハるハ北名此  
化やくハかハ信濃のハ諏訪部の任人ハ保家當  
合利光盛と名乗掛たり實盛中けりハ去者  
有とも用置たり但和君をいさハ何らん  
此ハ北のハ名乗ハ一唯首を討て見入るハ入よ本

當夜ハハ後一志られたらん其心切に化を一  
人抱りて戦其敵の嫌をうり来れよと隊  
其中またに弓腕もはみてつゆ手替むけたり其時  
は隊の部ホ一人のて小並して中にいたつる其  
實盛にむすしと云い實盛寸知るるしと云い  
おしめては隊の部ホ此押つけの板をつうすくてたの  
よりそはる隊のいなりてろよめての銃つよくとみ  
むつと引たりたれはは隊の部ホ引落され久實盛  
おしんけの板を志た、うまつとて馬の腹ホむつは  
けてはけてまの足と地が一尺ホのりなりは隊の  
を二つめてにつひすもして實盛の槍の袖ホつと云い  
急い声を出すもに槍を越ておに落ちたり實盛二  
人敵を向むしつとせし程ホ引落されぬ前  
かろく實盛の敵ホを取て押し腰の力を以て首  
をのくは隊もすまれぬ實盛の弓の草摺を引  
つけてはと腹をさし多りりさ、して槍の弱を  
つみすもはるも上に乗居てヤルに軍とヤハの  
此名はみをりす敵を名乗て敵に倒せにれはは  
面白れ誰人とし人あつたうやをりせん怪た  
首あつたえてもゆせん堀溝にの控人すりせと云

を二つめてにつひすもして實盛の槍の袖ホつと云い  
急い声を出すもに槍を越ておに落ちたり實盛二  
人敵を向むしつとせし程ホ引落されぬ前  
かろく實盛の敵ホを取て押し腰の力を以て首  
をのくは隊もすまれぬ實盛の弓の草摺を引  
つけてはと腹をさし多りりさ、して槍の弱を  
つみすもはるも上に乗居てヤルに軍とヤハの  
此名はみをりす敵を名乗て敵に倒せにれはは  
面白れ誰人とし人あつたうやをりせん怪た  
首あつたえてもゆせん堀溝にの控人すりせと云

久しと齊友が當名乗す〜死と一度いひてんよ  
名乗す〜家首をと人みぢ〜十ら能能首九つら  
者哉とたや〜控色〜んと云れハ力及はず首を控  
の事をもつあれとせ小車多節小物の具け飛して  
首を控す木を友にあらぬ事の中ららん光盛初ら  
〜世首を社うつて〜名此化とせめふせ〜つ化若  
木曾友ハ見ん〜志りたらうんと申す中て名乗ん  
〜侍〜存〜源の直業を控えて大將年〜名〜つを  
控〜地〜の〜置本名西國乃出家人〜と名〜つ声ハ  
取東去す〜と〜木曾のつ化是と武蔵此國此  
住人京友別當にあらゆらんの事但考れぬ〜下  
年義仲、幼目小〜白髪は〜をあり〜控人今  
と跡外白髪にあら成ぬ〜んに髪髪は黒いれ〜控  
怪〜久し何れ志あらん梅口と申す同僚にてみぢは  
らんみせ〜とて梅口を〜梅口〜と名引つあけ  
て一目みて〜〜かきてあを學ゆんや實盛にて  
い〜と中木曾の〜髪髪ハ黒い事と名りれと  
梅口はれ〜其子押〜らん〜〜弱く  
洞の〜久れ〜也ろ夫取者い〜の事にて〜出  
る洞をとつ〜置つた事〜武蔵國に常に通い

く時京友別當、本よりいれた人の尋常に  
少くも若くもいゝ愈光に中いゝ事と守りし條りて  
後軍の陣に向いゝと白髪此社へあつたれに  
髪盤に書をありて若屋もと思ふ也其故は老武  
者ともあつたも口傳又若屋京に弟て先をわけん  
りおとわけありと中いゝる實里をやりていゝる地や  
あをのして洗はせてうせんとつと中せいさも何ぞと  
として洗はせてみえたと白髪うち洗はたり扱ふ  
疑ふ事實盛共知て々礼錦の直書をあたり書  
事と實盛系を出る日内大臣の中りると一子東國  
此社へあつたれにいゝと矢を計中いゝる浦原の條り  
登ていゝる事實の老はの耻唯此事いとあつた  
北陸道へあつたれにいと善惡生ていゝる後いゝる一子  
とあつたれにいと實光うけて此死はつゝ一子に  
か付て實盛りといゝ事あつたれにいと人々いゝるを子  
所へあつたれに武藏此國に居住はていゝる事たたと  
は中の故つと事實をいゝると中の事今度且に實光  
の處を也事の直書いゝる書をいゝる事と中いゝる  
内府うつたれにいと事思ひてはつたれにいと事  
いゝる事思ひてはつたれにいと事



伊東九郎討死記事

是を志すとして平家の方へ妹尾大郎二百五郎  
にておのてかく源氏方が加賀此國の任人倉光太郎  
二百五郎の勢を向ひて妹尾の二百五郎の中へ此入敷  
小最ふ倉光妹尾は押あきて組てととる倉  
光は太力ありたれは妹尾を取て押したり人倉光の  
部は二百五郎をとりて妹尾を生捕りてとる  
堂後玉ふくは是を志すとして平家の方へ  
伊東入敷の息伊東九郎二百五郎にて押上り  
たりとる方の根井彌五郎治此勢を伊東九郎

の二百五郎の中へ此入て翌後横槍に散りかく根井  
小最をと伊東九郎は組てととる伊東九郎  
を死て押し首をとりて此伊東九郎は源氏につく  
つりたり平家の参るる父伊東入敷の妹尾  
池野んと由い候しを漫不佐友小告たりて  
伊豆の山へ逃したりし小よりて奉公小無影佐  
友政東を討取て徳倉小飛任の初伊東入敷は  
比河は比く此勢によりて自害して矢し時九郎  
を召出して討とる者として小忠ありを  
うらむられは九郎もとる誠小志を長り入

てなるは父の入居に敵と成て失せし又其子とて  
世ふらん事面目を泣き受つる者も父の入居者を  
射参らせんとしつ時潜ふ言中ていふ事ハ  
一切未にも息を蒙らんと思ひしもの早に  
首をのこる處に然らずと暇を争つて京へ在るに  
てやふらいつた中りて君を射参らんとし中りて  
兵部佐友らうあつたまの考をいひつて切  
る事いふ人多し其れによりて中へ返つて神  
妙也早に中家につけると暇を争はせつらりて九節  
中家に付参りて小陸をふりて路にたふす射れぬ事

世に衣れぬも其後木下小部ホ今井権兵衛井大室小  
室を始とて家者として責入間中家に軍兵馬ハ  
らに成面りむけず引退く大庭太郎間下小部返合て  
防り間下に部藩より三般沖にたあら岩あり其上に  
下りて参る敵を射参りて自害せんとや思ひに  
ん小具足を切捨る所を田舎を射参せて死にり難成  
次部経遠馬をいひ換て叶ひに自害して矢にたり  
大庭太郎藩小部返て総敵をや組やと云所ハ武者  
二騎つれて左右よりつと参るを二人をつらんで  
左右の膝の下におはして参りて志き射参れ共根井小

彌大に首此骨をいしめて死す大將軍権亮三位  
中將宣ひらるをいしめて死す毎度軍に負るは方々大  
勢也歎と小堀也と組比軍に負る事此等一人一福  
りや七月朔日朝日向て軍をすれは此等負るめ  
ひけ後の軍にせよとして引退く木曾と是をみて  
十とやふは落るは一騎のをもすといはれや若も  
とておひりの射心は村よりはれ本も高橋の地か  
にておひて子入さんくはけやなりて引退せは今井  
四郎三右衛門をお具して入之て又戦ひは志ハ  
く戦ておひしれ植の次郎三右衛門にて入のてお  
共責たりはれ歎の事し討ちて引退たはれは根共彌大ニ  
百金給お具して中へ地入て責たりはれは本を是を  
ふて際か向てせは討ちやくと申知しあはれ小室大將  
共百金給をお具して入之て責たりはれは志ハ  
引と立つと源氏いとも今れす追うけておひは村  
守ハしよといはれは中家もつては逃すは中にて京一  
共と云はれは去月には十万余給にてなりし今  
七月の軍も負て敗るはと其勢僅小二万余給は  
七万余給と小陸道とて討ちて戸を道の邊よりし  
たり中家今度走るは是侍大將殿を以てしとく

此れけふかく砂がたけりぬる上へさくくさくさし  
流を尽して渾時と多く魚を採るといふも明石小  
魚ふー林を焼て時時と多く魚を採といふも  
心算かー後をたて仕徒小すくや成をきいして  
かふ友兵をたけらるるけりものを口中人の何り  
たり内大石むねとたみ給ひたる中の三河守をたれ  
又長程の攻めず一討までいふもあつんと笑ひりる  
めのとあつる京をたけぬる上と大臣殿といふを  
えとれあつる父系家中りる京を小あつぬる上と  
生る何のあつらん今いふ身のことぬをたて出家(後世

して後世を 吊る懸りと世中りる今度たけぬる者  
よの父母妻子たあつるかーい喜限かー家とあつ  
門戸をとちて声々小念佛中何ひたれい京中とい  
まーいれ事とて整りりる昔天宝大なる兵災  
馳向て何處に去れ月小万里に雲南二行雲南  
小隔水有天軍徒より流にた湯た如く未幾十  
人の二三ハ死村南村北に哭声悲しー唄の娘小あ  
化まら妻に別る前後事小征者千万人討てむとり  
攻る事かー新嘉縣副使雲南北征戦を恐り子  
廿四く夜涼人志つかりて後月大石を抱て膝を

つち折れたるを強靱を初るは位小くすしして右の  
臂は着せり左のむちと折たりといふ雲南の征伐  
をすぬれ又骨をけ節傷て苦し系何れも折月  
此折か出るは平正の一支をすしれたりとつね若一身を  
全し今に至るまで風吹雨より雲よりしゆ  
夜は天の明に至るまで痛て不眠しれも後悔ます  
後所は老の身の今も有事を然るすはありしうは當  
初慮水の頭小死て雲南の里令の鬼とありて万人  
此塚の上小突す如くしたる中しうはひひ十八路雲  
小似たりといふ其縁に助られて居るに於令此は  
かゝる事しうはつらや

一柱をおすといふは極末八十何十の喜に道や  
吾北國北城徒此事院の山所を宣有左大臣源宗  
右大臣兼實左大時實定皇后大夫實房堀河  
大納言忠親梅小治中納言長方此人を云は系  
堀河右大臣の参りありたり右大將大藏卿兼  
左大臣にして堀河大納言忠親の唯能は山祈禱  
祈はるる申を誓奏はれらる左大臣は門も受  
らるしと十何れは多持いふいふりける右大  
臣は東寺に秘法ありやうの時祈はるる死にや安

此長者に依りて、（一）のと申させり。長方軍  
兵の力今ふやうに、（二）の内大臣に尋らるるに  
其後の事あり。と申す。礼なり。

西阪本赤山堂山布施此事

廿日院より延暦寺にて薬師經の千僧の法壇經  
を新くし。是ハ兵革の内形也。山あせに。手化  
此布一万人供米袋一院。別當左中辨兼光  
朝臣信を兼て催す。法壇經の事ハ王典代  
職官のあせの供米をわひし。西阪本赤山堂に  
て是を法壇に。法師系を以て受取間一人に。し

何事かを取法師も有又子を空敷して。その昔  
何事にも有り。然る間。法壇經と事  
をいたす。王典代。廬官。鳥帽子。あせ。内。て。敬  
敬の。り。し。て。世。を。り。て。と。王。典。代。を。り。し。て  
山。の。あ。せ。り。あ。家。の。志。を。し。る。神。事。佛。事。の。形  
一。し。し。て。印。を。り。し。る。同。日。於。人。左。の。權。佐。定。長。兼  
り。て。祭。主。大。神。宮。大。中。臣。親。後。殿。上。口。に。在。り。て。兵。革  
た。い。ら。う。に。大。神。宮。の。事。あり。し。由。り。し。せ。り。し。り  
何。事。大。神。宮。の。事。附。大。宰。大。貳。廣  
繼。此。事

大神宮とやら昔高天原より移りしを  
岳仁天皇此御宇廿五年と中戊申三月小作坊此  
度會郡中鈴川の上下津岩根小大宮柱と志丸  
たて祀始と給ひしより宗廟社禊此天照大  
神より御代とん宗敬しと給ひし吾朝六十余  
かに七百余社の大小神祇冥道にも勝てし  
其代、帝の臨幸ばかりし大奈岐の御門  
此御時右大臣不比等の孫式部公定合の由子右  
近衛權北が時無大宰大貳藤原の廣繼と  
いふ人より天平十二年十月に肥前國杵浦  
郡にて一万人の凶賊をお誘ひてむらんをおこ  
し帝をよきけとんとしつらうし開しか  
と大野東人とやら人を大將軍にて國に官集  
二千余人より集て河つらつて歩たはれお其  
由祈にかかると上月より始めて大神宮へ祈事なり  
れ今度此所とせしつらうし廣繼とて後  
其亡霊のたて怨怒し事共多かりり同十八日六  
月大宰府觀世音寺供養せられり系去時信正  
といひし人を厚師に請られし小俄小室たりり  
黒雲中より竜王たりりて彼信正を取て天小界

に有り思ふかといふ事あり是に有り彼靈を神と  
崇められたる今の松浦明神是也其後正吉備大臣  
と入唐して法相宗を吾朝に渡りたり人入  
る此時糸人其名を難して去時といひて還て  
亡つといふ通言あり本朝小帰して事と色ををた  
人もとやありけりとのや扱もろふ程程てれち彼首  
を與福寺西金堂の子にあたりて空に上つと  
笑ふ言へりたり此寺は法相宗の寺ありといふ也昔  
もかゝる兵亂此時の山願をといふ事ありにや  
漢成天皇此山時大同五年庚午の帝尚侍の  
勅によりて世に此山に始て帝の  
才三皇女有智内親王を加茂のまに三々もて  
ありたり是又齋院也始也朱萑院此山時天慶乙  
亥二年將門純友の叛及の時此山願の八幡臨時  
と祭始たり今度も今度も今度も今度も今度も今度も  
聞

木曾山門棒牒帖事

木曾冠者義仲とたひくは合戦に於勝て六月  
省しと東山北陸二の道を二のふちてお上る東  
山道と先陣と尾張國墨江股川に著北陸道の先



陣は越前此國府に著評定しるを抄山門大  
衆と申し平家と一也各西近江を抄れりし  
小東阪本のおふけりし唐崎の三津河尻かこり  
大坂京へ入るに十系條の山乃大衆の増出と  
止せりし十人お破て通らんすも亦れも當所を  
坐敷に佛神をいれん寺をさしし僧をもあひら  
し後此君候をいせ我等も此守護のにめ小登る者  
亦家と一なりしとして山門の大衆をさしん書かりた  
りしぬ二の十いりししはれしとして此書小ためりて  
登るる處より道を通るす系及す是れ抄大書なり

大夫覚明と申すは山門の骨法粗兼る小衆徒は三平  
人心定一味同心する事なりし心こふれし志  
り中なり書り美飯を十者ゆらけ破る事もふれ  
三平人一同小亦家と一成しし事も不定也原  
氏小志思ひ申す大衆よふとのあつん牒帖を爲し  
しとして牒帖を山門遣はす彼牒帖を以て覚明と  
書たりける彼覚明と元一禪門也勸覚院に進士  
藏人としてある出家して西桑坊信叔と共中  
信叔奈良小寺なる時三井寺の牒帖を南部遣

たりける返牒を信教と書たりける大政入道淳  
海と平家此糟糖武士の塵芥と書たりける書を安  
らぬる小ありいて、いづれを信教尋取て祿せんと  
斗りし一聞（はれと南都の都の程近はれい叶い）  
とていて南都を逃出たりし思ひはれ昔入居さ  
し方便を付けて置れりし一歩（はれい）ありえの  
案をよと叶ししと思ひて涙を流にてりしとて叶い  
たりはれ、腫脹より白癩の如く成たりかくて南都  
を真白益し逃はれりしをのる者もふりし信教  
於都の由りしてさるらんてとていいて鎌倉一下に

比部十部藏人の家平家追討の爲に東國を都  
責登りけるの黒雲侯川にて平家合戦を遂げ家  
散、小舟をたれて引退く三河國府にたて有る  
所、信教の令をて平家につれり、真此癩小の  
らより、乳の中、小腫脹より垂りてりし、信教、成小  
り、平家三河國府にて任勢大神宮（中）りける  
願書り此信教を書たりける、其後平家無慮佐小  
中、いひて信濃に越て、未だ小跡たりける時より  
して信教本堂を教て改名して未だ大夫是明  
とて中より山門、此牒、帖、六月十日、山、上、小、波、多、勢

十大講堂の夜小會合して是を披見す其帖

三云

奉親王宣欲令停止平家逆事

右平治以來平家跨張之間貴賤擊手經素載足辱進止帝位恣慮掠諸國或追捕權門家令及耻辱或擲取月御雲容無令知其月分就中治承三年十一月移法皇仙居於鳥羽故宮遷博陸之配流於夷夏西鎮加之不依象外無罪夫命積切集國抽忠解官之軍不可勝計者歎然而衆人不言道路以自目

之哀重之治承四年五月廿日并因親王家欲斷利利種之日百王治天之御運未盡其負本朝守護之神冥尚在本宮故奉保仙罵於園城寺既果其時義仲兄源仲家從依難忘苦思以奉庖徒從翌日青鳥飛來令告密通可急參之催急奉嚴命欲企豫參氣平家聞此重前右大將呼籠義仲乳母中原兼遠之身其上住氣舟之伺之怨敵滿國中部從無相順心身迷山野東西不覺之間未致參浴之時有御會儀言園城寺為躰地形

平均不能禦敵仍奉近仙蹕於南都之故  
城遂合戰於寧治橋之邊刻賴政令父子三  
仲綱無綱以下率尔步立心中相遠之間被討者多道  
者少骸埋龍門原其之上為施鳳凰城都之宮畢哀哉  
令皆數度之約一時難參會悲哉同門親昵之笑一  
且絕面謁軍抑貴山被同心黨家忠戰哉否令年  
力平家思逆哉否若彼黨令年力者定我等不  
慮對天台象從企非分之合戰歟速觀平家值偶之  
會議被修當家安穩之祈禱若猶無義引者自  
減茲覺門徒定有象徒後悔歟如斯觸中事全  
非恐魚徒之武勇偏只尊常住三宝故也何況獻  
山魚徒殊護持國家者先蹤也詔旨云朕是右丞  
相之末葉也慈覺大師之門跡也是則慈僧終所致  
備繪也早遂彼先規上祈請百皇無方之由下披翅  
万民豐饒之計者世世起一丁返牒を送其帖云  
右六月十日御帖同十六日至來披用之氣數日之誓念  
一時解散故何者源家者自古推乃武弓奉仕朝廷振  
威勢禦王敵爰平家者肯朝章起兵亂輕皇威好謀  
叛不被極伐平家者卒保佛法哉爰源家被制伏  
彼類之間追捕取本寺之千僧供物依侵損未社之

神連魚徒等深祈啟案內之氣青鳥飛來幸授  
芳札於今者永魏平永安穩之祈禱速可隨源  
家合力之僉儀也是則歎朝威之陵遲悲佛法  
之破滅故也夫漢家負元之曆曰宗無隆本朝廷  
曆之天一乘弘宣之後桓武天皇與平安城親崇  
敬一代舟時之佛法傳教大師開天台山遠奉祈  
而王與爲之御願以來奉金輪護玉躰在三千  
之丹心魏天變拂地天唯是一山之効驗也因茲代々  
賢王皆仰羅洞之精誠世之重臣忠持台岳之信心  
不誦一系院御宇偏慈覺大師門徒之日輪言明

白也九系右丞相并御堂入道大相國發願文曰  
維居黃閣之重臣願爲白衣之才子子々孫々久固  
帝王皇后基代々世々永傳大師遺身之道同施賢  
王無爲之德加之永治二年鳥羽法皇柔教山御  
願文之昔踐九世之尊位今列三千之禪徒者皆備  
思之感淚難押靜室之隨喜尤深星霜四而迴皇  
德三十代天朝久保十善之位德化普施四海之民  
身國平家之道場爲吾爲家之聖跡也運止本  
寺千僧供物改化未社神輿未寺諸七社權現之  
威光益盛三塔魚徒之願力新成欣爰義仲以

不肖之身誤步迴廿余々國經渭之間北國諸莊園  
不遂乃貢之運上誠是自然之恐戰也申而有餘  
謝而難道舒莫哀將門結友之類神不稟非礼  
者辱令知見心中之精勤耳宜以此等趣内令達  
三千之衆徒外被耳九重貴賤者生前之所望也一  
期之懇志也義仲恐惶謹言

壽永元年六月十日

源義仲申文

進上 惠光 席律師 御房

山門三千之衆徒亦堂の牒帖をみて合儀を申  
はち也或ハ富家此方へよりもの有り或ハ原氏

此方へよりむと云者りまはれハ心くの合儀なり  
ぬれも所せハ家亦專令稱聖主天長北久を  
祈す事平家當帝の外威山門へて改敬  
を以すれハ今ハ至平ハ彼敏思を祈りたれと  
ハ頃よりハのよハお家思は法ハす事間ハ  
夷乱を起ハ万民是を肖くハ依る射をまハ  
すハしつとも諸國歸て兵賊ハ追放されて  
度ハ逃收平是仰ハ佛神不ハ獲運命未ハ臨め  
らふらつて也源家ハ近ハ度ハ此合戦ハ勝  
て復外皆ハ内伏す機感時ハ運命既用たり

何嘗山社爲運頌たる事家に同意して運  
命盛りの原氏を崇めしむや柴山王七社といふ善  
逝此真慮ともり難く就中今の牒送の趣を以  
非無事歎事家性偶のありのを翻して迷子源家合  
力に思ひしはす人さき者一同の追討賊徒の降伏の  
黨、由前苟衛命頼企征伐爰魚鱗鶴翼之陣  
官軍不得利星旗雷戰威逆徒似乘勝若非佛神  
之加被羊鑊叛之凶乱足以一向攻天台之佛法不逞  
恃是言之神恩而已何況本憶臣土之曩祖亦可謂  
本願餘尊彌可崇重彌可恭敬自今以後山

川有慶為一川之慶社家有譽為一家之譽所  
善所惡成喜成憂各傳子孫永不失墜藤氏者  
以春日社其福寺為氏社久攻依法相大  
乘宗當家者以日吉社延曆寺和氏社氏寺親  
值通四寶頓悟之教彼者遺跡也為家榮幸  
是今之精神也為君清淨罰仰願山王七社王子  
眷屬東西滿山護法聖衆十二上願龍王  
善逝日光月光十二神將照無量之丹誠岳  
唯一之至應然則邪謀逆心之賊束手於軍  
門果虎殘害之徒傳首於京都我等精苦諸佛神

其捨給或仍當家公卿等一同意化祀而祈請如件  
敬白

壽永二年七月

從三位右近衛權中將平朝臣資盛

從三位平朝臣通盛

從三位行右近衛權中將兼丹波權守平朝臣

正三位行左近衛中將兼但馬守平朝臣重衡

正三位右衛門督平朝臣清宗

參議正位行皇太后宮權大夫兼修理大夫備前權守平朝臣

經盛

莊園併如舊而被守堵三千人衆徒合掌而祈至於東  
海之光一山揚聲而願平家於南山之色山徒願首來  
謁怨歎來年乞降十乘床上上真上扇昔之風三密檀  
前遙滌十旬之雨昔依鬼徒會儀執達如件

壽永二年七月日

大衆等

木曾尉若此返謀在二一大小一收一り一り一禮一ふ一所一の

惡僧白井法橋幸明慈雲房法橋寬光三神

周梨源慶亦在先一り一て一登一山一十

平家山川牒帖遺書

平家又是一知一了一す一一一て一兵一福一寺一園一城一寺一々一大一衆



憤りを念たる好意を以て彼を以て靡くはし山  
門を當宗九代を不結當家又山川此ためた不忠  
を為せん山王大師に祈禱して三千は鬼徒を悔  
とて一川相十余人同心連署して願書を  
山上へ送る其帖云

敬白 可以延曆寺歸依准氏寺以日吉神

尊崇如氏社一向仰天台佛法事

右當家一族之輩殊有祈請者趣何者叡山者恒  
武天皇御宇傳教大師入唐歸朝弘圓頓教法於  
斯處傳舍那大戒於其中以來為佛法繁昌之天

岷久備鎮護國家道場方今任巨國流人前右兵  
衛權佐源賴朝不悔血過是嘲朝憲加之与奸謀致  
同心源氏義仲行家以下出當家同心抄掠數國責  
押領萬物因茲且追累代懇切之蹤且任當時弓  
馬之藝云速

征夷大將軍從三位行權中納言兼左兵衛督平朝臣盛  
從二位中納言平朝臣教盛

正三位行權大納言兼陸奥中羽守按察使平朝臣賴盛  
前内大臣從一位平朝臣宗盛

近江國佐木莊領家預可得分等且為朝家字稱且為

資故入道菩提併處廻向千僧供料候也件莊早為寺家  
御沙汰可令知行給候恐々謹言

七月廿九日

平宗盛

謹上 座主僧正御席

とぞ去たり大衆を渡らひしすと延暦二年傳教大師少僧  
山に此ほりて法護國宗たる場を同一宗圓宗の教法  
を弘め給ひしより十のより佛法盛りて王法を古を  
らりて久く然るを此二三の間に東國此山徒亦多く此  
道をあはせ國祝言物をあまにいと重んずるを  
抑るし朝家を敬ししと備ふにたはしつゝ向すのけし  
都に責せんとす防戦に力既に尽み仍神明の内資  
に向らばしつゝより外はいつて愚堂を退とらん山王  
大師憐を垂りて三千比衆徒力を合とて是をす  
人いふにたはしつゝとらん心をあはれし社を志は  
らぬかあまりしは化より此山にのつる子に社慮に  
い叶はず人なり少きけりしと力及す既り  
源氏同心の返牒を送る物と教人又其後を愛ふ  
つゝ誠心扱はして大衆重の由を憐ければ  
許容する衆徒りかりけりかたりたはし人の情も  
と向い西向すを源氏概り尋るものたはしとたけり

ふれハ一定源氏勝訖事遂まけりん<sup>上</sup>とて<sup>上</sup>  
に遷つた官ありたる<sup>上</sup>松小面より<sup>上</sup>やれ<sup>上</sup>收ひ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>些<sup>上</sup>涉<sup>上</sup>  
す<sup>上</sup>凡

### 薩摩守親頼此事

十八日肥後守貞徳<sup>上</sup>西より上洛西<sup>上</sup>の輩む<sup>上</sup>けん<sup>上</sup>此<sup>上</sup>由<sup>上</sup>  
等<sup>上</sup>ハ<sup>上</sup>先<sup>上</sup>と<sup>上</sup>其<sup>上</sup>依<sup>上</sup>徳<sup>上</sup>の<sup>上</sup>ん<sup>上</sup>為<sup>上</sup>と<sup>上</sup>去<sup>上</sup>る<sup>上</sup>に<sup>上</sup>下<sup>上</sup>り<sup>上</sup>たり<sup>上</sup>々<sup>上</sup>る<sup>上</sup>不<sup>上</sup>菊<sup>上</sup>  
地<sup>上</sup>改<sup>上</sup>部<sup>上</sup>城<sup>上</sup>廊<sup>上</sup>を<sup>上</sup>攝<sup>上</sup>て<sup>上</sup>攝<sup>上</sup>統<sup>上</sup>る<sup>上</sup>る<sup>上</sup>た<sup>上</sup>や<sup>上</sup>す<sup>上</sup>々<sup>上</sup>責<sup>上</sup>成<sup>上</sup>す<sup>上</sup>  
す<sup>上</sup>く<sup>上</sup>有<sup>上</sup>る<sup>上</sup>小<sup>上</sup>貞<sup>上</sup>徳<sup>上</sup>九<sup>上</sup>カ<sup>上</sup>此<sup>上</sup>軍<sup>上</sup>兵<sup>上</sup>を<sup>上</sup>誰<sup>上</sup>く<sup>上</sup>て<sup>上</sup>是<sup>上</sup>を<sup>上</sup>  
責<sup>上</sup>る<sup>上</sup>軍<sup>上</sup>兵<sup>上</sup>多<sup>上</sup>く<sup>上</sup>討<sup>上</sup>成<sup>上</sup>され<sup>上</sup>て<sup>上</sup>責<sup>上</sup>成<sup>上</sup>す<sup>上</sup>力<sup>上</sup>あり<sup>上</sup>唯<sup>上</sup>城<sup>上</sup>  
を<sup>上</sup>打<sup>上</sup>固<sup>上</sup>て<sup>上</sup>多<sup>上</sup>り<sup>上</sup>日<sup>上</sup>數<sup>上</sup>積<sup>上</sup>り<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>城<sup>上</sup>の<sup>上</sup>内<sup>上</sup>に<sup>上</sup>兵<sup>上</sup>銀<sup>上</sup>米<sup>上</sup>

つ<sup>上</sup>れて<sup>上</sup>菊<sup>上</sup>地<sup>上</sup>終<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>人<sup>上</sup>必<sup>上</sup>に<sup>上</sup>多<sup>上</sup>貞<sup>上</sup>徳<sup>上</sup>九<sup>上</sup>カ<sup>上</sup>に<sup>上</sup>兵<sup>上</sup>糧<sup>上</sup>  
本<sup>上</sup>完<sup>上</sup>懼<sup>上</sup>す<sup>上</sup>應<sup>上</sup>友<sup>上</sup>一<sup>上</sup>人<sup>上</sup>宰<sup>上</sup>府<sup>上</sup>使<sup>上</sup>二<sup>上</sup>人<sup>上</sup>貞<sup>上</sup>徳<sup>上</sup>々<sup>上</sup>使<sup>上</sup>二<sup>上</sup>人<sup>上</sup>其<sup>上</sup>  
從<sup>上</sup>於<sup>上</sup>十<sup>上</sup>余<sup>上</sup>人<sup>上</sup>權<sup>上</sup>門<sup>上</sup>坊<sup>上</sup>家<sup>上</sup>七<sup>上</sup>莊<sup>上</sup>園<sup>上</sup>を<sup>上</sup>い<sup>上</sup>は<sup>上</sup>り<sup>上</sup>責<sup>上</sup>懼<sup>上</sup>す<sup>上</sup>  
菊<sup>上</sup>地<sup>上</sup>原<sup>上</sup>田<sup>上</sup>等<sup>上</sup>堂<sup>上</sup>類<sup>上</sup>及<sup>上</sup>伏<sup>上</sup>十<sup>上</sup>部<sup>上</sup>十<sup>上</sup>を<sup>上</sup>お<sup>上</sup>具<sup>上</sup>して<sup>上</sup>今<sup>上</sup>。後<sup>上</sup>  
十<sup>上</sup>本<sup>上</sup>刺<sup>上</sup>斗<sup>上</sup>八<sup>上</sup>糸<sup>上</sup>を<sup>上</sup>東<sup>上</sup>。河<sup>上</sup>系<sup>上</sup>を<sup>上</sup>北<sup>上</sup>。六<sup>上</sup>波<sup>上</sup>羅<sup>上</sup>比<sup>上</sup>密<sup>上</sup>所<sup>上</sup>、  
著<sup>上</sup>小<sup>上</sup>り<sup>上</sup>其<sup>上</sup>批<sup>上</sup>僅<sup>上</sup>か<sup>上</sup>九<sup>上</sup>而<sup>上</sup>爲<sup>上</sup>流<sup>上</sup>平<sup>上</sup>流<sup>上</sup>に<sup>上</sup>た<sup>上</sup>る<sup>上</sup>は<sup>上</sup>測<sup>上</sup>り<sup>上</sup>る<sup>上</sup>前<sup>上</sup>  
内<sup>上</sup>大<sup>上</sup>臣<sup>上</sup>家<sup>上</sup>盛<sup>上</sup>車<sup>上</sup>を<sup>上</sup>七<sup>上</sup>糸<sup>上</sup>に<sup>上</sup>た<sup>上</sup>て<sup>上</sup>。二<sup>上</sup>五<sup>上</sup>り<sup>上</sup>鎧<sup>上</sup>着<sup>上</sup>た<sup>上</sup>る<sup>上</sup>  
者<sup>上</sup>二<sup>上</sup>百<sup>上</sup>余<sup>上</sup>流<sup>上</sup>其<sup>上</sup>中<sup>上</sup>に<sup>上</sup>前<sup>上</sup>院<sup>上</sup>二<sup>上</sup>守<sup>上</sup>親<sup>上</sup>頼<sup>上</sup>々<sup>上</sup>十<sup>上</sup>河<sup>上</sup>を<sup>上</sup>せ<sup>上</sup>す<sup>上</sup>、  
一<sup>上</sup>た<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>の<sup>上</sup>直<sup>上</sup>糸<sup>上</sup>に<sup>上</sup>未<sup>上</sup>成<sup>上</sup>の<sup>上</sup>流<sup>上</sup>居<sup>上</sup>て<sup>上</sup>白<sup>上</sup>草<sup>上</sup>九<sup>上</sup>成<sup>上</sup>馬<sup>上</sup>、  
衆<sup>上</sup>て<sup>上</sup>貞<sup>上</sup>徳<sup>上</sup>、屋<sup>上</sup>形<sup>上</sup>此<sup>上</sup>口<sup>上</sup>と<sup>上</sup>打<sup>上</sup>たり<sup>上</sup>危<sup>上</sup>頭<sup>上</sup>形<sup>上</sup>ハ<sup>上</sup>意<sup>上</sup>方<sup>上</sup>疎<sup>上</sup>

お授る頼憲の子也勅後守の嫡子也坊たる武重の  
家よりいふ事也とみる人あは識り何  
つり今の武士に年月が掛す唯此人をのみ見る西國  
と儘に平居れば東に彌地を以て既に都つて  
奪らんとすつゝの事家次等小人弱く成て防中  
に中力も尽て都に跡を止めりて内を以て院を  
引具くもり参らせ一々の成も果りやると西  
國の方へ引るにけりてを儀せらるる

佐渡左衛門尉重實事

七月十三日曉より何といふるに開けし後六波羅の

邊大と強く京中も又おろす資財雜具東西の運の  
返すにいと志の事也とて魂を消す糾あつた  
大りの帝都の名利の地鶏鳴安<sup>お</sup>急<sup>お</sup>いり治  
化る世にたり如斯況や亂たる時と理り也吉野山  
七奥はかくもいふまほしく思ふも諸國七層一  
天四海に亂れぬれと深山遠國も何國に浦あはし  
うるに三畏無安猶如火宅衆苦充滿甚の怖畏し  
説ふ如来の金言一乘の妙文也かゝる遠の處に  
やめりして此度一生死をまゐりて極楽浄土へ往  
生すべとぞ歎き何りけり此曉係は澄る事ハ

美濃源氏佐渡左衛門尉重實と云者有一年  
筑紫八都為朝、近江國石山寺小隱して有るを  
加めて出しるをして左衛門尉よりあり源氏小僧を  
たれてま承承に應つらはりるる業一端中あり  
その瀬田を巡りて夜も中の六波羅小池上て北國  
此源氏既に近江國へ入りてまさにをりありし時に  
人を通す瀬田にけりるるをりけり北に六波羅  
中の瀬田のりりかりたるる新三位中將資盛の大將軍  
として負能く下に治橋を追りて近江國へ下り  
十二の夜に下瀬田にまりるるをり北に六波羅の又新中

納言知盛の本三位中將重衡の大將軍として  
勢田の近江國へ下りてまさに人を今夜六山科小僧と  
其勢三千余騎を去りて源氏六山の大衆と同心して  
六山治瀬田をとりてまさに山田矢池谷田多木  
此後三波の尾所の渡より小舟を借け湖の東側  
六波羅の押後してまさに六波羅光明を大將軍  
としてまさに天台山を競ひ上りてまさに持院を城廓  
としてまさに三塔の大衆同心してまさに唯今大岳をとりてま  
家を計んとしてまさに今夜六波羅の本にはま源氏の後  
陣充満す此上六波羅三位中將宇治の京へ責入本三



露も消回底のさうもあらん事よを本さか  
化父りかゝ母りかゝ身をかくる親た古も  
かゝ一人を頼るゝり外又頼む方かゝ先世の焚  
ゆれと由身拙き哀と忍びりふも人あはに情  
を掛る死に非すいゝあらん人にもみよ杯飛る  
事の恨くさよ別れをらん信と又誰かかみい  
るた知り者共も歩捨り化衆もせておらにけ  
つりさういゝた誰かはさみ誰は憐むるたと  
てあうかよめ置りもあらんと今後にたれ何す  
泣き入る三位中将又宣ひはるを誰に人八十四

維盛十六れにみ初まりて今区八十歳成歎とふ  
そお母ゆれ火の中水の中もいゝる供入院て  
俱に沈没何の道には後れ先道ならしとあは  
むのれ共りくあはるれ有抗にて合致のたよと  
む三てらあうゝあてするも不定也此衆り志うぬ  
旅の宣ひにてう年のをさやちうらん事りあ若  
かとお故うそあをり何のふ々旅に相り守るる  
別れちりあうはにり悔りてあ若しく見えれと  
てあさりふあ若娘君はた若さうまの女房  
それあは並居はるり是を尋て声あかしくあす

泣き入り 冥理し受て哀也 此北の方と申す中門  
新大納言成親令の内姫也 容顔甚々越て人優  
おおいしき事より常より有るしきあり  
けれはふつての人よみんる痛しきお原されて  
女御后なりし父母思ひのいなりかくたつたれ  
人と哀とあひあふらうりたり 法皇此由を聞きて  
山宮にすあひ心そ忍びて 山書方名は是  
りよりみしとて 山返る中も現るし  
雲より吹き風のほけしとて 涙の露の思境の哉  
と早あなりのいなるあやしくたれ 父成親令 法皇此

御書方多し 在す思ひて何もて候るひけ礼より  
始書向て 夢入りはいと親の為孝の人にてあり  
はしとたれは 父子の後志をやりける 社悔しむるを  
より 後の父子は 歎かされ申りぬ 山方一人 山道とて  
のうんと 宣ひたれと 上下悲守りて 道ふ人よし  
ののと 山の無形依と申す 女席一人 山道のり小祥  
片れて 通ひりる 是より 申す 世のうまさ  
をとりと 山いそす 山いける  
結つる 歌まも 山すえいひ 山ける 山けり 山せし  
と書て 引法て 山いなり 山依是をみて 山おた 山





と申中より如君ハ悉又此君と申中より

### 法皇鞍馬寺に御幸此事

昔日夫時に主上忌むて六条御幸ありけり此の  
より人かたて事いせりて一して何とてさきたる  
出る水面下瀧法注寺に御参りて瀧法皇における  
小山田お當有重とてお親くみ此二三の御家あり  
小島勤いひつる唯今注中つら御家の夜京曉西  
國に参りてつくいとて以介にいらぬ成り加ふ  
系と申んとて既にお家をいひつらつて既てか君を  
御ありつらつて既にお家をいひつらつて既てか君を

とて人にかたて希事申りける法皇は心にけ成る由  
言ふれを嬉しくお告りたり此事又人よ注中  
の事申す中いひて一して作の有りきを兼りてす  
其れ山所をてお出にり其後小次文ら程の内大臣  
と藤塗の烏帽子に白帷子小大に申すをいそり  
と建礼門院の北方に参りて申すいけり此世の中  
はのりとお告りていひつれも今ハ叶ありけり  
社にこれ部の中を宮後の合殿して早しかく  
りおとんと申す人よつらつて其れもの念より  
おほくつらつて主上此山に侍君の由有れいと痛いと

かうしけろく心参らせらるる叶はらん中々も西國の  
方裁てみいやおりのひん年上皇宮をとり具し  
番らせだんされ鎮西に輩にり少きいりし源氏  
いとしく都へ入らるる誰をの頼みつれ唯天を伴  
て主かす大のちうにておれんすれ其時にあつ  
与方乃奴系と一定心のりしとて心いしに成  
んす身後主上都へ改し入するせらま由  
なとすたれけれと女院の洞も世をせせまう  
て早かろた、能抗とせし侍有る内府又中  
出れらるる主上は此事いさるるも儲君二宮を

も男しやうせん魚し中りて法皇をりけし  
系しせんし院内をたし方人に取するせん  
かいつくすたりも誰を方人しとて世をり  
早らるるかと中て世の夜に女院の洞前へ後夜は  
しうし以未れ事しとあめしと中りけりあつけ  
ても此袖もいしと志ほれたたり女院の洞衣の洞社  
に何する洞つとて三返せられてをみしせりひら  
秋の長夜も何けしあつる成にたりおの洞夜は  
けりし法皇し世の洞殿上に出御りて今夜の  
番はたせしと早のり左馬頭資時と中されたり

凡ハ北面に伺ふ志はらんとのみかの一々まは  
と小室のり毛波判官知原薩广判官信盛源内左  
衛門尉定宗の事を資時二面て尋うんたりをや、お  
此より小室に河れた、今れたと志のひて河るを也と  
ありあをやの事をわらうに地うせつん、故録す  
事り河りおろく人を一々て此中席お一つうま  
北と法皇おほせ河りけ北と御前多ちあはは後河  
くたよりおほ河北とよおのく衆てやのて由う  
をのつちりあ志す河礼つげられし西の小川と作  
やと出せさう、故録降るおとあ一人おり

河よあ北のたをとけけ北ハ為末と名乗る法皇元お一  
めし志うせりて由もつちり北とおんせ河りたは  
十道りり、二条保徳氏人為末とて北面うけら  
也七条京極を北ついでけと作有ん北ハお北く河  
せあふりてけりりる為末ありん御事ことおひた  
北ハ日をせ御事にて河りるよとして志りたる人を  
尋りふ一所や中尋り、二条京極にて征矢にくら  
ぬり此ろをかりえそ降衣のをけたうくはあみ  
てけし、北をゆつげんともあたり、あ、一、ん  
い、き、つ、と、く、う、ま、う、り、あ、あ、せ、り、一、条、京、極、に、て

弓のつらばけしるおとたふ其志いっのくれば中  
院いたすの明神をうへあうみあてひくくの  
志むかとは成るは法皇よのうし終を  
以後十化、為未夫あひあうう口見いしよ遊ひる  
世爰此のしき武者哉とおかせゆりていふ地  
終りりて夜もけのくともはれ鞍馬の寺急の  
誓いしせむひなる

### 平家都府給ふ事

廿二日橋内左衛門のせう十人床ともあてける平  
家のあやういし院にりあうくのしつうは化れた  
おしり其夜法住寺あにうへうしたりをまうつひ  
此所以家のいし孫しんあめれた向ひて志のひし志  
て女房うらめら湯、志の志れた、あやうとあて  
けれと御家のうしうせうあめいつちあやうんとてら  
れ向ひり志康向さうといひてい志れたをうへ池  
希りたらけらに内府をいすい女院の由處より出  
いぬほとせやのて女院は由處へ希りて内大臣あよ  
ひ出しもうてあ由をや内府大によははれて、あひ  
志うてよりしあ書向ういし書、そ志あからんと  
けあひあらい志法住寺あ、池集りあてたつと

考らせらるればはたはたはる人て是れ花  
なりやうして女席丹後の席を初とてして入るは  
らに後す大臣を君はいつく小やらせりやとや  
されればも我とあり兼あつたればといふ人か  
かゝ多くあつてはかまひり何事やうかといふ事  
系々としてはたはたのゆけぬ法皇やとらせぬ事  
といひ給ふなりは上下諸人を七集りて山崎中ま  
といははくするものめあつてすすしておまぬの念は  
を承るよかたのうちに入たらんりうなり何れは是  
に過しては二つ一軍兵治中も志うすんとして

有るは八重宮此一門をぬ人もあつたすはぬい一  
人なりありは此は法皇と御事をりあつてと  
志いせられたり久れ共かくつらせぬは内府はた  
此堂木下は雨はしるぬ心地してはりともは御事  
斗もかゝる衆らすしてして四六一はりして御事  
りりしてけあま鳳輦を西海の浪小い共く居れば  
白のぬも主上未いしてかかぬよをいあはれをた  
んかく合ふは神酒玉宝釵も返して建禮門院をかか  
し衆にきりぬ内侍呼いりてしりぬ印鑑時簡  
其上鈴床に至るてよりくすして平大納言時忠下

知しむいなり十れとも余りに向はるにけ礼はりおと  
とすりおわりのなり登れ此是れ山奴り此いりそくめて  
なり山こりして内せぬのたれハあ後余人の事大細言時  
忠内藏双信基斗を衣討交り志うして供せり  
たりける其外の人ハ公卿も近衛司り御深佐りみ  
あし後こひをたあへり女房ハ二位女を初中りて女房  
ホー十二七ちり馬上ハ女席ハすしり公七茶を西  
朱雀を南ハ以幸ふる夢杯のやうありし事とも  
也一ハ都移りしとて向りしとこのりし御堂ハか  
りあうりし志りしとて有るよしと今もあつたひ向ハ

十れからけハれの中ハ何者ハ見たりとんハまの  
世ハ小礼小書下三ハあり

向つ下りしもの大凡ハ礼儀西ハささりし  
六波羅ハ舊館西ハ茶屋ハ初て此殿ハ書殿ハ  
中の人ハ此宮所ハ三十余所ハとて火をうけたれハ此宮  
板十町ハおしして口の光りハありし或ハ階下誕  
生の靈跡龍棲幼稚の青宮侍陸補佐の由居所或  
相府丞相舊室三台槐ハ此故亭ハ九蕨宮ハ鳥の栖  
なりハ前盤宮堂上榮花の初如夢如御強兵減長有  
荊棘姑蘓臺之雨露満々暴茶寒長無席根感陽

宮の煙はふりり漢家三十六宮の項羽の爲の  
けりかたは久し是に過しとて二一は無常  
春在地風散有涯言月伴雲隱誰采花如春夢  
不驚可恨命粟与朝露共易於蟪蛄戲風遊逝  
之樂歲許蟬蛄論露合歎之声傳韻鹿園十二樓  
上仙之樓終空雜蝶一里中治之城不因多年經  
營一時廢滅矣法皇の仙洞を出ぬせあつて  
二子せりす王上鳳凰を去て西山として祈幸か  
りぬ関白及八吉登山此真の山なりとせぬとすゆ  
院宮みやまの八幡縁上京八幡加茂のよの片邊にこの

くははせりぬお家のたれとも原氏いすい入らる  
此の都すふぬとをわし人ふたをたにもぬと  
天地のやより此の山いかる事ありつといたは  
志すす一の聖徳太子の未來記あり今の此事社  
少うくたれおお國禪院をよと八条太政大臣と中丸八  
条より北坊城より西北方二町此亭ありとつて  
彼家より入るこせらぬとつた小焼たき大小棟の  
敷五十条に及あり六もろとて乃志す一原の故  
刑部卿忠盛の世小出吉原也南々六原か茂川  
一町を爲すこつと方一町ありを此お國の町



造りし是も家敷百七十余年及一り是れみあつて  
北の鞍馬跡より始て東の大空をへたて、衣己の  
隅小本友造廿余町及ふやを造化したりし一  
族親類、殿原乃室部黨眷属、此住家おぬりし  
是をのせしめ、此、且千二百余町の家と一と小煙と此は  
りし事おいたし、一とわい一斗か、一と法性寺  
此院内をのりし志、時、一とかけたりけ化と佛の由ち  
く、にてのおおとありし程、小瓶後、家貞も亦  
にて故科、中々盛入、さおふ、小雲内府の業、本所と  
を城、おのてか、の、堂、堂、正、西、の、間、お、お、う、へ、お、た、て

佛とより、に、屋、尼、お、けて、骨、を、と、首、に、お、け、り、の、事、を  
を、から、し、家、貞、主、従、成、たり、此、寺、を、故、入、り、相、國  
父の孝養のために号名の同進、禪を代へ、本寺、本  
像といひ、畫像といひ、馬、馬、を、お、お、う、今、園、を、受、て  
す、し、し、し、在、嚴、美、樂、に、し、て、時、に、より、て、並、ぶ、し  
今、館、を、住、信、員、を、吹、禪、侶、磬、を、お、お、う、たり、と  
り、し、し、し、し、須、史、の、向、お、お、う、た、へ、お、け、り、され、は  
佛のよきおれ、り、る、畢、空、の、理、は、お、れ、を、り、衣  
礼也、諸、法、無、常、眼、亦、也、權、亮、三、位、中、將、才、方、に、人、系、り  
て、り、も、お、お、う、源、氏、既、し、お、入、り、の、つ、き、より、法、皇、も、や



程の如く三位資盛中将法範以下おとたち四人此来り  
ありて我ら此輩を大抵平よりまのうせはよひ事なる  
うよせしむせりしにいふあらは連系地也とのぬと云はれ  
つにてみつをうたつたを大抵後七よ原系た軍のけ  
れを社子免是をいひつやふらんとて舟舛んとに  
はるすす淵をたふされらるはても何のつた事なり  
を思ひきりて出ぬいより中川廊にて渡りてたて馬  
引もて既に行出んとしぬむれ六代山前姫君中川  
門下けり出程は左右に神ふりつたてて父山前ハ  
つくつたせりやとて禁も参りんと志すいひらひ

とておけしむれ世にわきしむらみへりれすうたにぬも何  
てられす社有りける京後か宗貞亦後六宗克とを子  
比身あうくのしつういふやういなり兄弟也中将の  
二人を言てはありぬらとをたれ法をた子出筋かけぬと  
く身をもあたつす古仕つれ、器具していふものなり  
あうん所よかくもちをのかくさせんとははさひつれと  
りいとけあらぬものそのめをうらぬのうかたれと  
乃れら二人そのまゆりておはあれたものも乃杖柱  
とありのしりぬおまをかつるる何のいふしち  
西國のあらんかといふひかすやうに

と云ふら(め)に二人のもののよき川をみの友存よんつ  
れて中(ま)らと書(か)につ(つ)入(い)り考(か)らせし(し)ありゆ(ゆ)ー(一)この  
事(こと)何(なに)と命(いのち)を授(たま)は(は)つんと(と)い(い)ひ(ひ)り(り)て(て)は(は)ん(ん)と(と)す  
て(て)ら(ら)れ(れ)糸(いと)を(を)い(い)と(と)う(う)は(は)い(い)だ(だ)う(う)さ(さ)な(な)い(い)お(お)り(り)を(を)向(む)か(か)て  
い(い)ふ(ふ)ん(ん)や(や)理(ことわり)を(を)申(ま)けて(て)は(は)は(は)に(に)い(い)つ(つ)と(と)申(ま)れ(れ)お(お)わ(わ)く(く)の  
言(こと)の(の)よ(よ)き(き)中(ま)に(に)う(う)ち(ち)子(こ)お(お)つ(つ)り(り)て(て)は(は)は(は)し(し)と(と)め(め)お(お)け(け)か(か)と  
ふ(ふ)ら(ら)お(お)く(く)か(か)く(く)と(と)申(ま)せ(せ)ん(ん)の(の)ら(ら)お(お)言(こと)を(を)い(い)は(は)い(い)と(と)す(す)  
か(か)ら(ら)て(て)の(の)あ(あ)の(の)お(お)や(や)と(と)信(ま)ず(ま)く(く)い(い)ふ(ふ)く(く)あ(あ)く(く)い(い)ふ(ふ)い(い)は(は)  
と(と)い(い)ふ(ふ)涙(なみだ)を(を)お(お)さ(さ)し(し)い(い)ふ(ふ)く(く)と(と)す(す)り(り)次(つぎ)げ(げ)ら(ら)う(う)よ(よ)な(な)お(お)つ(つ)り(り)  
て(て)お(お)り(り)を(を)し(し)を(を)つ(つ)ま(ま)て(て)志(こころざし)い(い)は(は)れ(れ)と(と)り(り)申(ま)せ(せ)ら(ら)れ(れ)お(お)の(の)め(め)

す(す)く(く)ー(一)此(こ)の(の)り(り)も(も)お(お)お(お)の(の)め(め)ゆ(ゆ)ら(ら)の(の)志(こころざし)に(に)ゆ(ゆ)ら(ら)つ  
る(る)い(い)つ(つ)の(の)書(か)を(を)お(お)し(し)の(の)中(ま)に(に)い(い)は(は)し(し)ん(ん)す(す)り(り)か(か)つ(つ)り(り)て(て)不(ふ)忠(ちゆう)お(お)え(え)れ  
と(と)い(い)ふ(ふ)社(しゃ)共(ごん)衆(しゆう)の(の)と(と)思(おも)ひ(ひ)て(て)か(か)く(く)一(一)申(ま)す(す)り(り)に(に)あ(あ)り(り)申  
将(まさ)を(を)く(く)ん(ん)つ(つ)う(う)く(く)あ(あ)り(り)理(ことわり)を(を)お(お)し(し)ひ(ひ)け(け)れ(れ)と(と)い(い)ふ(ふ)程(ほど)に(に)  
と(と)す(す)と(と)申(ま)す(す)後(あと)ハ(ハ)す(す)う(う)の(の)後(あと)ハ(ハ)す(す)い(い)け(け)に(に)す(す)ま(ま)た(た)お(お)ほ(ほ)て  
涙(なみだ)に(に)な(な)れ(れ)て(て)お(お)え(え)ん(ん)り(り)ふ(ふ)つ(つ)ら(ら)す(す)程(ほど)の(の)袖(そで)り(り)と(と)い(い)ふ(ふ)志(こころざし)は(は)れ  
は(は)な(な)れ(れ)ハ(ハ)お(お)た(た)ら(ら)れ(れ)み(み)ら(ら)る(る)お(お)の(の)す(す)の(の)つ(つ)ま(ま)く(く)共(ごん)衆(しゆう)  
お(お)れ(れ)北(きた)の(の)方(かた)に(に)お(お)は(は)り(り)の(の)北(きた)は(は)是(こゝろ)程(ほど)お(お)し(し)け(け)ら(ら)れ(れ)ん(ん)と(と)  
志(こころざし)を(を)り(り)り(り)つ(つ)つ(つ)り(り)つ(つ)り(り)お(お)し(し)け(け)ら(ら)れ(れ)と(と)い(い)ふ(ふ)つ(つ)ま(ま)て  
ふ(ふ)く(く)ら(ら)る(る)お(お)お(お)始(はじめ)若(わか)者(もの)も(も)お(お)に(に)ふ(ふ)く(く)一(一)申(ま)せ(せ)ら(ら)れ(れ)て(て)お(お)た

よりと程られぬれいりして片時めらうとく  
らすつしともあはれあはれ世のがれ後れれたた(志  
たふをたんらりーあつす身じよりあつんせりて  
とまりにかくもつりあしおはされ人この事をさひ  
りていりて字に授く家ーかりけり

### 池大納言都留給事

池大納言頼盛殿の火をつけて志高く登すり為盛伴  
と盛之の心列をいしてお出さる侍共落敷て目つ  
く小其家三河路鳥羽の南の赤あるに籠りすういかり  
かゝり大納言四方をみこしてのぬけりて御事には

おなれかいはは後あふ何り申宮ありん地の中らいひ  
に及ぶ此度かちやうん迹憂れまよ唯是より改ら  
んと思ふ也都りて言矢字のころあうーなりか  
れははれと故入原も志たひいて志いふさりたはるか  
く池をを焼はるを遠く予けれいさらハ京の古  
一徳をいお七く用事のため是らうー一人の世にな  
れいといかいかちーかやんら事くれ入道の山をを今ハ  
あふお地ふんか礼いさゆもあしーからうー都を迷  
いせていつくををうりたうく女房をい(引具ーて  
旅にぬる事のゆるし侍共皆未印あすてトものあひ

けしとさくふり標<sup>本</sup>京の時<sup>本</sup>をうりに新たり京と  
今原氏お入ぬらんこの地へ入らせり一屋敷と仰り  
かけ北の物も田にも京を離れてこの地へ移るま  
とらとて大納言先んおて馬をよめて攻りま  
ふ多<sup>二</sup>者何やくくきこひり九条の牛首をたけり  
小八条院の山所仁知寺の常盤友、衆りり大納言  
片女院の山所のヨ子守おて中女房おおをせら  
几たりけしと此山所へ衆りり女院より姉夫女  
院より始すいせ女房おおをせらたりけし侍共  
いよ夢のやと作せたり大納言の山所の中置まいて  
直垂斗を山所をくちされけり世本の所りや女唯  
夢れとくにて山池殿お火をぬて山所おつち出  
の佐佐木つらつらへり都へ入りて君の見衆  
お入出衆入るをり仕り終りて後生おたすのり  
と存てかく衆りまのち中しれとて女院三位殿を  
山傳とて山所へお入るなりけし原氏十人  
京へ入て山家をせすつと山所さんにとりて  
を此山所へいりまのち世の世を何とやおか  
きしり何とあをけしと頼盛由良て山所  
けり誠お出るなりけし山所をま

ありいそいそかんかしのとゆ大事にあしひはつた  
とりはれれれとと女院又いふよりよくいひそく  
つるしは、一原氏との志す、い伴達の兵衛佐基  
か、一おれれとれありありやんはほりたらふさりよ  
よの別書、わしわしふくを故入るると一心にて  
おもせはりのれそく、人のか、一吾家名跡とて世は  
か、一とあんと作有れれ頼盛世にわんと  
中、一うんでう今、わりのん、一屋ま唯今、あ人、一を  
愛うしと、はありひん、一ふ、一あ、一は、一た、一か、一や  
またの参り、一故母にた、一さ、一ち、一て、一ま、一の、

たみと頼朝とあり、いんす歌に世はわんとあひそり  
おれたのありと頼朝、たむ、た、一、一、一、一、一、一、  
し、一也、一紫、一の、一ふ、一み、一と、一是、一た、一も、一あ、一て、一い、一と、一て、一中、一河、一由、一カ、一れ  
く、一い、一よ、一う、一け、一さ、一せ、一た、一ら、一か、一は、一然、一然、一よ、一り、一取、一を、一して、一足、一素、一に、一入  
う、一れ、一たり、一か、一か、一一、一事、一あり、一あり、一又、一さ、一り、一た、一る、一り、一わ、一り  
あ、一れ、一れ、一よ、一刺、一の、一つ、一れ、一の、一あ、一と、一ん、一と、一血、一後、一の、一り、一その、一止<sup>上</sup>  
討、一の、一法、一の、一い、一れ、一か、一う、一た、一も、一何、一あ、一し、一い、一く、一池、一殿、一七、一及  
系、一に、一世、一の、一い、一て、一ろ、一を、一引、一つ、一と、一ん、一証、一を、一た、一り、一い、一法、  
小、一の、一み、一か、一と、一國、一の、一軍、一兵、一に、一も、一兵、一衛、一佐、一や、一う、一の、一の、  
れ、一り、一ら、一と、一り、一や、一執、一中、一次、一前、一兵、一衛、一盛、一次、一大、一臣、一及、一此、一也、一か、一に

すゝみいで中身と池夜はそまゝをせりいふにも  
河をこれすすはあしくい者あう上とすら此車  
かゝりさうさひしりの糸りの社いふんふい  
矢一村うけて糸りのつんと中はれ半しはかく  
も河をあんどのちうめんをすすれていつく  
はりあつらん所をすあうれししてそまゝか  
と此ものい流れとしていゆりしせしすあまの屋  
つるう方とこのあじうしせんさうくそまゝ及はす  
とて大臣屋れりいひる三位中将いり此まじりい  
たはれ小番屋にんたもり、すし二軒もいすせ  
あはすしとかりれんすあはれとつんすあめとてま  
んあはれとあはれつめしをいふも七房うをい  
此出ひりあを新中納言みまいて境あひいすけた言  
書也今文おと後とつ尻にあられた都を出ていす  
一日たにり過ぬ小人、七人ともみかうりぬ新河地  
あはれとこのうりれ都にていすもあひこのり詭つあ  
り此をとり大臣屋れをすみやりいいてつ、けた  
あはれにりけ小りとおひて衣也すあはれ  
権三徳はぬ雑屋新三位中将資盛左中は信院  
以下兄弟共六人引具して渡東六田河系を舟過て







いふ事にしておらん人をはいさすものありあんな一河の人  
にまゝ望まざるにせんとせしむる路のれは  
盛政引加り小多子抄政成の都へつらせ給ひて  
西林寺としよつ時に渡りせ給て世にとも知是院一  
世のいせ給る是を志らすくて抄政成の  
所更つと世の中病ひる方河尻に源氏まじりたりと  
聞ふればと肥後守貞能也向ひたりる備子にて  
つりはれの端りより来る此人の病をなす病の  
おろし貞能の病ひるおのひたれに病をとおし  
此上病ひれば大臣殿此病にたて馬を下りてり  
にをばみてつらしむるを志して中多子と病ひるや  
とつちとして渡りせりや都を志して病ひるに  
くにもあつせりや西國の病ひるにたれ  
あせりや病ひる又病ひるやあつせりや  
しよおわへん病ひる人とも交りし病ひるに  
れてかきこを志すの病ひるにたれ  
社へつけられし病ひる事や新中納言本三  
位中將友引らせり(けい)病ひるにたれ  
物知せし病ひる病ひる病ひる病ひる  
事全くとちにて病ひる病ひる病ひる病ひる

とよ家の山運土等つたは勢が返らぬ所はこれにて  
うま返りの山はふまにさうして終をみせん事うして  
ていびとやりれは新中納言大臣殿にまをばらま  
してまゝとたにんうけよあひひつて大臣殿の目いひ  
負能い中は志うぬは源氏天台山に乃作うて谷々に  
志うせんしたる也此夜せんうりか院の目さらせ終  
干かありし身ひとりのあつたといつてせん女院二位殿  
を始きて女席のやまのつりたらしうたぬをみせ  
ん事もむさんふれと一すも中とあひあつたうあつ  
ういすも禪門名將の山はけの所よ宿てあひま行よの  
あしを中をれてあり成もあつた中とさうなりと  
此あへは負能又中りるとも夫とあつたい妻子を物  
とれむにたにらつて思ひまゝの事にては社おひ  
あつてつくたこへは源氏にあらうふよりのやせの  
よめいし又法皇をいひたしとてふつてまゝいし勢  
てやせらせりふつよいも素りあつた勢が終て中  
をえふあ素りうせては終すめりあつたうくいらん  
季康わうとせつけやして山らんわりの女席たらの中  
に志りあつた事とよめいし何しをいひて  
あつたうりんせはせ終いあ季康の事とやんあ



處を尋中流んすつ山にまらせりやうし一開(けい)の  
其の母福いん十としてあのみい福もせん其の夜々  
ゆゆれを自然に所いあう入て何とつあまりかく  
山廐にたてられける山馬をい急りく引出し一そ  
則ち氣を付也小なり盛攻景徳入治の事と僻  
事にくせ有る自然にけくあり(も)あうらあ  
らんとして西をすし一てあにけるんのとら山をこの  
かしく北田のめしをれし一東國に者共宇都宮左  
衛門尉朝経留山莊司重徳小山田あ當有軍を京  
して何りけつ子息所従者みか魯阿佐よ志よ

に先れは是ホハのくあかられてつてしを西國へ  
くし下と地る(一)と沙流を名を自然にれらうひ  
年をめされたつんによるす一妻子もんをくあを恋  
しくぬらのた(一)とくし山小(一)何て本國へく  
るくとはひやうん中れを誠よすも何りあん(一)わ  
首を起りたりより運命つたか(一)世を(一)ん(一)し  
か(一)あんちうゆ(一)たりとも(一)富運(一)と又にあ  
つら事(一)あし(一)か(一)つ(一)た(一)ら(一)あ(一)そ(一)す(一)る(一)き(一)り(一)  
世(一)の(一)と(一)平(一)家(一)として(一)出(一)され(一)たり(一)是(一)あり(一)サ  
余(一)も(一)し(一)一(一)み(一)名(一)あ(一)れ(一)と(一)け(一)る(一)あ(一)り(一)い(一)け(一)の(一)ま(一)あ

くよ後出いそみいをかきつてまうりそまうりたり  
其年小舟船又た御門と貞徳の船とを回来り幸に  
ふれて苦心ありけりともや原氏此世にありての  
ち貞徳の船又たを頼みて東國へさうりか孔むじり  
比りし年早れち中流り苦かんしなるとうや雪の  
此人の流の後世の程を船をたつて乗るに  
うち出れあかしり或志地のの流すさう八重の  
海ををるつ舟に押す人あり或は遠れた  
けし此を志のいつ馬に乗人あり前途をいつ  
定の十生涯を國裁の口は船にておのい

に権高られり権亮三位中將此外は大臣夜を神の  
て世のよあ人こなる妻子を引きし多し  
らいよあ人のみ引しつふおよび給ふる船ふよの  
置しのはおろし別れをかきしつ後れをさふ  
のんさうしと思ひしものもこれ船のそするもに  
小袖を志のりけり多かりそのの別をに恨し  
命を志をししす別れん社のおしんれお徳代  
うしよの流さるる重徳忍といつてさするんか  
れらうふくみの涙をかきつて大方りよほされて  
出れ共すすれす船をほろれさくまののおれ

妻子り早んかたは死につれりゆやうさりけり流の  
大渡りより北に男山ありふつ子南無八幡三歳以後  
一度都返し入らせり人と世かたつて後孫んしむひる  
此れも神意かいつ何りけん平かき誠小古をハ  
一層んのやりにあてて若達方里北流をてけいつ  
ふおちつくつしとふく何くらおちるやん心のう  
ちおしもう礼て何れ也世乃中にや古しく何に  
れかり事と薩守忠度と世の唯今の好士  
かたせり此皇太后宮大夫俊成を執をとりて千載  
集をえつこれり忠度御宇四五諸程何むらして  
四塚北也よりぬりて彼俊成を北五系京極北宮所の  
赤たひんへて河をたてせられと内よりいふおち人  
世と一ハ薩守忠度と名吾北れ也後人にお世  
と聞て世のついでまた返るもせられす門も何け  
さりなれ其時忠度別の事をもいひた此程而首  
をて福ていを見系に入すして外士へおちんす  
北口おしゆふりちて衆りて何のくちくくは  
だちかもう入る衆小入のやといひたりけ北と三位衆  
とおかしてわかしく出合る世志のやうい  
とよかうん何とまそ此道小谷をのちん事し衆



七面目たわへし集撰もたの申す此巻を物此申すは  
屋下夕夕つて思百三て一三入るれ白ひめんやうつ  
又念佛をのほそやうひらへしててるひふのころ  
より而その巻物を取かして門よりうらへかけ  
志度今と西海の浪小志つむも此巻小あひかく  
書ひつたはゆり入せまへとをふみしをわしへも  
あひひかくるものつれはれ入せまへとてかみしを  
くまぬ小なり後成今海をわしつて内へ入てつり  
火しえしを此巻物をみられれとあしりの中故  
花とつた事を

は浪や志度の都と阿比らむをせうれうの山根  
忍慈

いつせむ宮木くまに摘芥の福をあげも志人の  
整れ、ちいさ程かておりにれと加の集えをれに  
忠度此道に達てては後たりと人あし海をりし  
勤れ人の名を入る事ははうり何事なれとて此  
をよ千人と社入るれなりなら延喜天曆八年  
を名によれ花山二條皇后を名にけりふ世の身  
歎とといひかうちかへし事也左馬頭  
盛り知り此道を好て京極小納言入り定家今も



いひて美里の浪小た、よひいづらんをたのふ、一ノ中  
此ふふし年をていふと申入たり、礼安宮の世をあはれ  
もいふりおぼし、めい、礼より又の世覺せたる社所は  
とて別山前、めい、礼禮正の礼をたぬ、小鶴をぬいたり  
よ、改む、これに萌、其、糸おと、これよ、い、を、是、たり  
けり、二人、此、侍、教、朝、重、時、男、た、り、禮、正、か、り、や、け  
化、り、と、十一、歳、と、や、い、く、時、此、時、に、初、年、は、て、朝、夕  
中、前、を、た、ち、も、礼、化、者、ら、せ、い、十、叙、爵、は、て、後、も  
禁、裡、仙、洞、此、出、仕、此、か、り、に、い、い、の、ま、り、と、て、中、の、中、前  
に、着、り、ん、し、め、な、ん、か、り、一、日、に、二、度、十、の、の、日、は

い、よ、も、香、り、ぬ、四、い、い、は、り、い、ふ、故、を、お、も、い、て、法、西、の  
旅、向、に、た、い、い、い、以、重、此、塩、浜、を、清、一、た、だ、て、い、あ、ん、後  
と、歸、京、其、部、を、志、す、は、い、は、れ、と、今、一、度、君、を、了、ん、系  
ら、せん、と、な、い、て、現、り、ん、を、こ、り、み、い、い、す、は、い、さん、仕、い  
言、て、後、九、師、有、盛、に、り、い、せ、に、り、い、ら、は、琵琶、を、そ、り、よ  
か、て、あ、つ、け、下、さ、れ、て、い、喜、山、を、い、い、か、る、ん、世、ま、て、も、才  
を、い、か、い、い、や、い、と、い、や、つ、れ、も、空、室、を、西、海、の、底、  
空、つ、め、い、ん、事、ん、う、く、ら、て、持、て、春、の、い、也、と、綿、の、袋、  
小、入、か、り、い、あ、ふ、い、い、か、あ、の、是、を、い、説、い、て、中、洞、小、む  
せ、を、た、か、す、い、い、て、中、返、事、に、お、よ、い、す、い、衣、け、袖、を、志

わが中も此書山と十山琵琶は村上天皇山時秋の夜  
川を渡りかくて凡乃おと身に志みておふとなく物衣れ  
那るに此山いをものれあし一帝第秋樂の秘曲を彈  
せは焼るる一小時文秋夜志川りよあるやうに記もち  
おといのちりも十坪のほり身に志みて崖(千のふ上  
六葉止秘曲のいりて天人のささり迎雪の社をひ  
らう一して別雲をふて乃かりにたり代この帝の  
山賊をものりるるを記すよつといりて此宮農の方  
にまいりて此宮物の整れ一して有るを此正十七  
歳一もうわらふまでして守佐宮執使小くいれ

時中よして守佐此拜殿にて日る志れたうにて  
海を舟をいたたり一神明山納受ありて天皇  
此ういあを一して社權にてすいあし正此奇矣  
乃瑞を扱して神明山納受ありらるとしてかくをん  
ひれみて三曲共一の流泉の曲を志る(られけれ  
と宮へん有るれとおのく杖をふるほうけり村上  
れはうが中のうし凡人此ことをいく事正一人にて  
有る加家<sup>室</sup>塗物成れと正身にうておくとら  
あはれけれと見を山後せんたひとに只を  
出つ下てふれ一ふとおふまはれらむひを参

らせのくろく

兵部中のののちまひいおろし福とを十年の良文の

宮田をおけしあせりして

おすしして別り袖の涙をと君のかけふはなみでせ

新所に涉ったたたり人おやしつりける中に侍従

律師の絶といひけり人といふくあのみ入るはたり

ふちりぬ老木つたの山嶽おはれたたり花を

絶止かき

旅衣よからし袖をかけたておのしをまきふかひ

とれはいて今をんふかから車いひ福いふよるの身をもて

まやうあのみかき事露んすとして山前をたれ朝夕

ふかひくくまひの袖のまり川れて衣の袖を志ぬ

られ利誠小夜をのけ福田をさとも山名跡いつ

れてさし福草はもろふけいけせ路のぬらんは

いと女中もんとてかめとの流をちめて馬にちれり交

乃以前一ちいれとれハ世をいひをさる有りては

つれよに生る時を未無一流は境かて南をさしそ

ゆいせたりかく心川ゆくはたれとも住洲一と

を唯今をえたりはてうら出られれいよるひの袖も

まはらゆりも福草に道弁糸あせんといちちをけ

られ危心のうちをたれんはけりて祈者は追  
尋せせてあふとく人のすみたるはかきあひつ  
けり。

柳津すの末の歌とやいよ様ふはまぬ浪のうへ  
平家六福原の舊宮につれて一夜をたのうすはるあ  
く禪門のれもの取ふありて過去聖美出離生死佳生  
極楽地登菩提と祈念して居る人の暮れを物  
いふうたにつくしとくとれり一岩あといつて表と  
ふてぬさるる居たりてり主上公鳥の山麓へ入地あり  
月の雲容皆故入すしけをの所へあはれけり女院二

位殿もあふせりて世の初り主上を時忠々といふ  
奪て雲の山寺のめんとあはれに給ふ内大臣以下  
一河乃人て皆川化て墓處をみるつとみりんあ  
ちてそそむせり忍草あはけりて牛馬の蹄の  
うさき也田實法眼書と供養夫より法華經  
八軸の石の撰の研に顔懐素の女院みつうを  
ひわいかなをせりてそそを長あれ二位殿の袖を  
あふめて、あふせられけりて役業敷かたりありて他  
あふめりあふめりつとあはれなりと幸心い  
まらるる草のみにあふりりり女院もあはれに

にらぬ身いぢきしといふかしく志ぬひし小吉内府  
ありともも是是に何りかとかれくを此後と辨かた何  
すべしといふにあらぬのめかより危あつぬに  
秋ふぬ旅七をらりのううんとしし事か  
此社ふんきく心し百社のめを乃ち幸六島の北野  
入勝治二位友いたき衆とて南向にまうし海す  
内大臣宗盛新中納言知盛大床北左右より衆り  
後で知盛中さ化ると波とりの衆をみる(い何か  
らんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん

飛彈守章永越中詩司盛俊以下侍共を召て二位及  
作られらる積善修慶宗小忌後悪の作鉄身小  
かより神明ふんふんふんふんふんふんふんふん  
まより帝教をすふんふんふんふんふんふんふん  
はあてふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
樹の陰小窓より前世の契後うす一河の流を汲  
り他生る旅ふをふんふんふんふんふんふんふん  
らふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
侍の川客也或と親近此好み他ふんふんふんふん  
或二重代此昔思ふれふんふんふんふんふんふん

母の恩懐も私をかりましたのくみの  
死てかか—みだる今この思慮をのく—  
てとすくをあらんやまよ十善の帝王三種の神  
皇の身も志たつ—くや—海神天照太神も三政て  
口の君をあら守り育—み玉のつく—此事をい  
ふよ高運つよん家あり十をふふ合致れ志を  
烈ち—そ二度終—つ—入をて逆徒を討ちて  
徳と昔も起名を後代ふその望とあの人を  
—して雲七未山乃とてすも君のあらつ—死り  
—はうん素—かうりも—火のくち—入の

庶子沈むも今うけり山の有根を—をてちりし  
と此あ—と三而奈人山前—並居たる者共老いあり  
わうれも涙をか—社を志はりて中ける身と  
恩は為小流—今—義にりてう流花—命を  
とわ傳の君もまはぬや—七鳥け—ものたし急  
を頼—徳をむ—ん—んと志を養れい—小  
中ゆんや人—て—て—心来—出ぬの—心を  
とすれて君をも控糸らせぬ—廿余—の間宿位と  
以、俸祿といひ身において名もあけん事も妻子を  
たひれみ師もをかり—す—の志—か—君の



山懸に何ぞとソカとかー飛中弓矢れ道小  
二心を整んするをりてふく世のちとすたとひ  
日本國此外ある新羅高麗百濟國の雲のて海の  
をてぬもかれきりうす同一中りれ二位度  
の大臣友と今更た此もーかかーのしくうれ  
かにつきてりつたふけせの涙の世をせ早の護  
之乃忠度かく早の二みひる  
これやぬーと雲井の別れと宿と煙とをけぬる哉  
修理大夫經盛々  
古を燒壁、亦は之をてす急の烟の浪跡のきゆく

平大納言

瀟湘で浪と子にただよとよ乾るは浦のむら身交  
同北の方  
波かつし海人よあしと、いとくをの軽の方をみるあともいふ  
海わたし志ありとおのふ旅たふり別れは邪にたてりー  
晁と波あすたちをれきていつくを流たよりあくあ、  
よ花らんはてお花らんお花くふかかりけのとおしけい  
ら化て何れ也中ふり入るはたてお花はー花んのまふの  
岡は山嵐初音をたつぬる山田は山所月ん乃秋の浦  
乃山所雲の朝の道は山所島は山所高馬場夜泉夜二院

此十し夜よりほしめて五葉大綱言此造りおれし  
里の内裡人よ此家、にいしるすといつし三子乃ほし  
にいたくゆれをて、みすもあにれもあつりり香西言さ  
をふりた秋の草刈をとらわすくに書おひつれ小鳥  
志けりてふ入神とあけくつうささめたくあつた、  
おとつま、このとそと本吹風の音もつり也侍ませす  
はー入りのとそはいりりらる月世みせあつりり然り  
けりた秋にかりけり火宅ハ物憂れおれたのよ  
東海に東にうりけをあつて、夕つらりつを西  
國の西にうり雲海流とそと蒼天十てふあけけん

と十孤島小考たあて月海上に浮ぶ長木の洞を穿て  
駒のひつのをばやむと石様のこゑに耳をおとあじ  
松浦の流をふて塩にむれて新舟をす天の雲  
にはるるなり夜あきみれと秋の始の廿四の月の  
出てり張み深新あつり志川あつり一の巻すあく  
して草葉にすらるる白霧も向たの命にもあつす  
秋の初風たちしりあつり夜をふ成り旅夜の床  
と草花あつり流もあつりあつり物あつりあつり  
夕れ二位あ大臣あ一氣にさし川といてさす  
けふあつりあつり玉つれ故入たか、さるるを兼てあつり

多ふや紫雲を志のて家なて舟をつりかうれたり  
車ものしれしよふとふしりしり来の車ものねがよ  
かしてたのいの涙をあつし玉ひる行した夜のはの  
くともめたりお家の政し源氏にみすかして浦の由  
所よりけしめて前<sup>所</sup>た火をうけて主上女院を始す  
て二徳後小政所以下の人びと船小免しして万里の  
海上かうく玉ひれを信火片くしして海上赫たり  
船を<sup>た</sup>あちし程おをふたれもたれも各跡かあちし  
うり危海人のたふしの夕くか瓦上の座のわつたの  
あつかはれししふさふさの巻神の窓のる風のうけ

目ふみ耳ふつて車下して洞をりししすしし  
車ふししお家と保えの妻のおとさうししりも青水  
乃秋のあまをとりをそし八条屋庫六波羅の書巻  
けしめて福系の里内裡にいたるそそ巻風茶をわけ  
煙雲はりのわをほしし龍頭騎首を海上たううて  
流乃上の泣きやすん時ふかふりな双也のばしし  
紅ハ神のあふりしすしししし青乃旅夜の昔乃  
志付くも古今の朝の忍ふにわやすし月をいたす  
うしし月のうのまうしし沈みおを夜ししし葉七  
り後しし命をわやあむすあまにさししししし

向つたの根をきつて世をいにかた柄柄の夜半小石  
をくくくく白濁の毒をたきふしれあをみて涼氏  
此をいをかひすつとういこのい夜尸は遠海小かくを  
てと兵は舟をかくるとかた海は音<sup>音</sup>虎小肩を破て  
翠黛集紅顔小も世をいさくおと海(蒼波眼を  
かちて懐土をの涙をおき(却くくお雲客は朝歌  
とかりて教を出世ありをれく母のー友京の仲磨  
此子之高野女帝乃中とん帝は従父兄才にて内外  
雅<sup>雅</sup>ししてん海は海寛臣とありて天下は改を  
この中<sup>中</sup>に枕りして世をいさくおとありは橋て一<sup>族</sup>

あしく朝恩小不こり帝は後十九は十路小忍戸不  
しくおけうのありして二文字をうつて惠美仲磨  
と名つけ世をいさくおと後には押勝と世をい  
はから大保大師に至りしては惠美大臣と世をいさ  
目を種をうつせぬ小志のいいて威雄ありくして  
人け怖畏し事今のまゝおと目出さし  
松小共り今も世のおせ改しれ事と河内國を荆  
としよ嘉に道鏡法師としよその有るまて禁本小  
ひらるり如意輪法をりらる志くくもる皇帝の由  
完愛をふれしく惠美比大臣は權勢事は衆ありん

おしつけられては法師七身も太政大臣ふかすれ  
山位を山位うんとおたうと免して大納言和意清  
齋を山位として守佐宮の中書少輔ひたりけるり  
山位を山位ふかりけりあつるかよひ勢をた  
し法皇のういをあつらひて可判法皇をせ  
ふみて帝をうらなふもつたり天平宝字八の九月  
十八日國家をわらへけをうんとその罪逆にけり  
りとのに十はかり覺悟ありしをも夜を中の  
れて死あひふかふおんといひ給くう大臣兵を  
川のてをうらなふもつたりせん十九日坂上河田磨を大

將軍として官兵あつくせのうけられたるからして  
一州引具して教を出東國、あつらひて出徒をの  
たらひて福朝宗をおもんとたふりしを官兵  
強て多九揚を引いた高島(む)ひて鹽は物の  
を過て難波の山を越て越前國にけりてお具  
くたり多九軍をと山位、帝にて渡らせり大臣公を  
あつらひて人の心をあつらひて、程小官兵あひつら  
てせえ、このを船小、みきて逃るる風列、しを  
浪のくたちてすそにあつらひんと志れたる舟より  
あつらひ、このを程小大臣、つらして、波近國

にて對化なり一族親類同令力此輩の如く(向)す  
朝(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
以上吉の如く(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
おまのさう(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
かして(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
大臣(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
る(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
法皇(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
加(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
融(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり

に渡らせり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
近衛殿 左大臣 隆家 右大臣 兼實 公内大臣 定實 公  
初(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
に至る(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
せ(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
誠(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
から(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
廿八(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
内(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり  
赤(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり(向)すなり

らしく其心百礼を命ぜりて雲霧海にまぎりて蓮花玉院  
此山所へいそせりひたり去程よも農辰の刻をり  
十部藏人必家任斐國の本嶺山を越て京へ入ぬ未  
刻斗に本曾冠者近江國を東取本をさそりて同く  
く京へ入りぬ又其外甲斐信濃尾張北河内氏より此  
兩人ふお志いのひいて入洛すを勢六万余海におよ  
へ入ててしうを立く所を追捕し衣裳をとり  
より食物を奪取しつる洛中のらう勢たの先  
かす身

高倉院 王子御位より可付給事

廿九日いつくの義仲の家を院御所へ免しりて別當  
左衛門督實家以下中辨兼光をりて前内大臣  
宗盛以下平家以下一類追討十卷れ由西將に言ひす  
西人庭上にひさまつれて是を兼り川家と禰衣の  
鎧直垂山黒草おろしり此禮をさそり右の義仲と  
赤地錦の直垂山唐綾おろしり此言ひて左のひり  
各宿所のいぬしを中々れり川家と南殿のあや  
此中所を給て東山を守護す義仲と大膳大夫信業  
の六条西洞院此亭をりて洛中を警固す此十余日  
乃前中をりて京へ入りて源氏を逐

討せよといふ院宣せんし中礼し今之文多し  
小原氏朝母心小橋り平家を追討せよとの院宣を  
中礼の川のる引つたる力ありて其の河をたれ也  
主上外家此忠意にひいて西國へ移りし事むふ  
ひん小おたり先此れすすやふかへし入るるに  
りし平大納言時忠は此より院宣を中礼すと  
いふも平家りちい移る力及もすして親王を十  
つちの庵まより院の殿上と公令せん此のり至上  
還御のりまより心の及もほしし作られ  
今もこのくしにたの小おたりしもの多ししひん

此の君ついでに七條の十は法皇が世加つて殿上せしせ  
きし馬子とたれと中礼のり人よりなりを依の例は  
百孝六代皇極天皇三十八代齊明天皇是と女帝  
也男帝此重祚の先例なりと中礼のり人かあり  
たり何といふ鳥羽院此乙姫宮八条院御即位の  
ち居たれと中礼のり人かあり女帝と男十五代七神功  
皇宮よりばりしのを推古持統元明元正也  
法皇思ふとつらひ七條のり丹後此法皇御  
たれりる故高倉院宮王子二を平定白河を  
又三四宮とたしつにこのりし月も平家代世は



世を計し十幾後て大誓泣らせぬいつれも今う  
かしのつらぬをいかりあふるまじしなるは法皇を  
しくあたらしく先くそて大誓のまけりなりぬ  
おろしくと吉のふえ衆あつとて恭親の口  
次を山尋有るんを来八月十日とりて誓のまけ  
らるしとて書けしすも誓の終ひなり

平家物語卷十四終

平家物語卷十四終

